

吉井勇と川田順

— 昭和二十年前後の書簡を中心に —

京都府立総合資料館所蔵の、歌人吉井勇宛の書簡のうち、交友の深かった歌人川田順差し出しのものを取り上げ、昭和二十年の吉井勇八尾疎開前後の動静を明らかにする。二人の歌人の心の交流を、書簡や新聞等に発表された短歌から探ってみる。同時に、大阪府立中之島図書館川田文庫所蔵の吉井著書やスクラップブック、富山県立図書館所蔵の戦時下の地方雑誌、新潟県糸魚川市相馬御風資料館所蔵の吉井勇発信書簡などを、京都府立総合資料館の所蔵資料と併用することによって、吉井や川田の具体的な行動を跡づける。この作業は、地方公立図書館・資料館などの資料を相互にリンクさせて活用する試みの有効性を実証する目的を兼ねる。さらに、未紹介の個人蔵の資料などを組み合わせることによって、公開されている資料館の資料の位置づけが一層明確になる例を提示する。

以上の作業の過程で、受信先で保存されることがほとんどである書簡資料を、宛書簡として一括公開、データベース化することの重要性についても述べる。

また、書簡資料等の調査を通して、昭和二十年前後の出版界の状況や、終戦を挟んだ歌人たちの心理状況、雑誌の再刊・休刊の具体的な足跡も明らかにする。

はじめに

平成二十七年十月にユネスコ世界記憶遺産に登録された東寺百合文書で知られる京都府立総合資料館^①は、それ以外にも多くの貴重な資料を保存している。その一つが、晩年の二十年あまりを京都で過ごした歌人吉井勇関連の資料である。一般には祇園白川河畔の「かにかくに」の歌碑で祇園歌人として知られる吉井勇であるが、第一歌集『酒ほがひ』以来三十数冊に及ぶ多くの優れた歌集を世に送り、生涯の詠草は二万首に及ぶとされている^②。歌集のみならず、戯曲・小説・随筆などその活動は幅広く、その一端は、没後三年にして早々に編纂・刊行された番町書房版『吉井勇全集』全八巻（その後増補され、全九巻）から窺うことが出来る。

吉井勇の場合、もう一つ見逃すことの出来ないのは、綺羅星

田坂 憲 二

のような友人たちとの華麗きわまりない交遊である。その範囲は歌人・小説家などの文学者の範囲に留まらず、学者・役者・実業家・政治家・マスコミ関係者など、実に多彩なネットワークを構築している。吉井勇を中核に置けば、昭和前半の文化史が見通せるほどで、その点は早くから注目されている。たとえば、京都ゆかりの人物であり、日本人最初のノーベル賞受賞者である物理学者湯川秀樹博士と吉井勇との交流を復元して見せた細川光洋の論考などは、そうした優れた試みの一つである。

府立総合資料館に寄贈されている、吉井勇関係の資料は五千点近い膨大なものであるが、交友圏という点から考えれば、吉井勇宛の書簡群がやはり注目される。今回はそのうちから、特に親しく交わった歌人川田順の吉井勇宛書簡を中心に検討してみたいと思う。とりわけ、最も多くの書簡が残されている昭和二十年とその前後に絞って報告してみたい。

一 昭和二十年の吉井勇と川田順

昭和十二年秋、国松孝子と再婚した吉井勇は、高知市内の鏡川の河畔に新居を構えた。昭和六年の土佐訪問と伊野部恒吉との出会い、八年の徳島県との県境に近い猪野々初訪、十年にはその猪野々に溪鬼荘を構えるなど、この時期、土佐は吉井勇の

魂の故郷ともいべき存在であった。平成十五年、猪野々に開館した香美市立吉井勇記念館にも、土佐時代を中心に貴重な資料が多く蔵され、溪鬼荘も隣に移築保存されている⁵。高知県立文学館でも、没後四十年、没後五十年には記念展示が行われるなど、高知の人々の吉井勇に寄せる敬意と愛情は今なお深いものがある。

その高知での生活を切り上げて、昭和十三年十月、吉井勇は京都市左京区北白川に住居を構える。いわば吉井勇の京都時代の始まりである。その二年後には川田順が神戸から北白川に転居してきて、親しく往来することとなる。その後吉井は、左京区岡崎、京都府下綴喜郡八幡町、上京区油小路、左京区浄土寺石橋町（現在の地名は銀閣寺前町）と、居を移しつつ、昭和三十五年十一月の長逝まで、京都を根城に晩年の優れた仕事を世に送り出すのである。ところが、その二十有余年の間、約八か月間だけ京都を離れていた時期がある。それが昭和二十年二月から同十月までの八尾時代であって、吉井勇夫婦は疎開のために京都を後にしていった。

昭和二十年二月二日朝、富山県八尾町への疎開を控えた吉井勇は、別れを告げるために雪を踏み分けて川田順の北白川の自宅を尋ねた。時間や天候も含めて、まるで、小説のように具体的な表現が出来るのは、川田順の吉井勇宛の書簡（京都府立総

合資料館蔵、文書番号五〇、以下文書番号のみ示す。)が残されているからである。封筒の表に「吉井勇 大人 親展」「二月二日 順」と記されるのみで、宛先住所も消印もないから届け文かと思われる。その手紙は「今朝は、御出発前の極めて御忙しき中をわざ／＼御光来被下まことに忝く候」と書き始められ、当日が川田の父甕江の五十回忌にあたること、門まで見送ったこと、泣きそうな思いであったことなどが述べられている。そして、これらの思いを七首の和歌に託して、別紙に記して同封している。

七首の和歌は、「雁がねも帰りいそがぬ春寒に吉井の大人は北へ往くとふ」(第二首)「門べまで雪ふみて友を送るかもこれや限りと下思ひつつ」(第七首)など、王朝和歌以来の伝統的な表現も交えながら詠んだ和歌である。この和歌は記念のために『京都新聞』へ送ったとも書いているから、同封の七首は吉井に向けて清書したものである。

川田の言葉通り、翌二月三日の『京都新聞』には「大比叡の嶺はさびしかり」「吉井勇氏疎開に寄する川田氏の友情」の大小の見出しの下にこれらの和歌が掲載されている。取材に関して何らかの事情があったのか、「昭和十三年岡崎に寓居を構へた歌人吉井勇氏」(吉井の住まいは十三年から十九年秋までは北白川、岡崎に住んだのはこの六か月。)とか「越中八ツ尾に住む画

家小杉放庵氏」(小杉放庵の当時の住居は東京の田端と赤倉(新潟縣中頸城郡名香山村)、八尾の川崎順二と昵懇でそれが吉井の八尾疎開を後押ししたのであろうが、放庵自身は八尾に住んでいゝるわけではない。)などと住所についての誤解があるようだが、概ね要を得た記述がなされ、川田の詠歌七首が全文掲載されている。同紙では「川田氏はその感慨を次の七首に籠めて本紙に寄せた、なほ吉井氏に対しては「君往なば大比叡の嶺はさびしがり越の冬山よるこばむかも」の一首を送り残るものの寂しさを比叡の嶺とともにかこつたのである。」と記し、上記七首以外に「君往なば」の和歌についても言及しているが、この和歌は、更に遡ること数日、同年一月三十日の川田順の書状(文書番号四九)で、吉井疎開のことを知った川田がいち早く「この古き京の空は安からず吉井勇は越へ行くとふ」の和歌とともに詠み送ったもので、『京都新聞』の取材に漏らしたものであろう。こうして、公刊された新聞記事と、川田と吉井の間に交わされた書状を併せ見ることによって、さまざまな事実が明らかになるのである。

二 京都府総合資料館と大阪府中之島図書館

書簡の内容と、それを裏付ける資料の存在は、近代作家の場

合は丁寧を探して行けば、ある程度復元が可能であるのだが、今回はもう一つ面白い資料の残存を指摘することが出来る。

大阪府立中之島図書館には川田文庫として、川田順の資料が蔵されている。図書が約八百冊、書簡が約三百点（吉井勇とも交遊のあった元中之島図書館長中村祐吉宛の書簡がまとまっているのが特に貴重である）、原稿や創作ノートなども多少残っており、貴重なコレクションである。二冊の目録（『大阪府立中之島図書館蔵川田文庫目録』、『大阪府立中之島図書館蔵川田文庫目録（II）』）が公刊されており、その全貌を知ることが出来る。その川田文庫の中に、新聞記事などを中心にした切り抜きブックが数冊残っている。その第四冊、背表紙に「昭和二十年・昭和二十一年」と記され、表紙左下に「川田順関係切抜」と記されている（墨書、自筆であろう）。この分冊には、正に二月三日の『京都新聞』の当該記事が切り抜かれ貼付されているのである。恐らく川田自身の手によってなされたものであろう。

すなわち、京都府立総合資料館と大阪府立中之島図書館の資料を付き合わせるによって、七十年前の、吉井勇と川田順のやりとりをそのまま現実によみがえらせることが出来るのである。各地の文学館・図書館・資料館に分散している資料を組み合わせることによって、個々の資料を単独で見るとよりも遙か

に多くのことを知ることが出来るのである。

もう一つ、同様の事例を挙げてみよう。吉井勇が八尾に向けて旅立って約一か月後の話である。

三月十一日の川田順の書状（文書番号五三）には、自身の右足挫傷のこと、橋本閑雪急逝に関するなどが記され、さらに「玉吟七首今朝京都新聞にて拝見、過分の御友情忝く候。それへの御返歌として玉吟の一首〳〵に即して詠むが古今東西の常套らしく候も、どうもうまく行かず、勝手によみ申候」として、川田用箋の原稿用紙に記された和歌五首が同封されている。

まず、「玉吟七首」とは、上述した『京都新聞』二月三日登載の川田順の和歌に対して、吉井勇が同じく『京都新聞』に送り、三月十一日に掲載された、以下の和歌七首のことである。⁷⁾

昨日かも越路に往くと告ぐるべく朝露踏みて友を訪ひしは
友の門の椅桐の実の紅きをば思ひ浮べつつ雪籠あむ
越に来てわび住みすれば友に似て髪の白さはいや増しに増す

かへり来と友は言へれどますらをの覚悟は極めて越住みぞする

越中の大掾ほどのこちして来しとし言はば友嗤はむか
切齒して思ひ極むるところありと越の雪風友に伝へよ
友を思ふ夜半を雪風吹きて入る越の旅籠の破れ障子かも

これらの和歌は、二月三日の川田の和歌への返歌として詠まれたものである。特に、第一首「昨日かも」の和歌は、川田の歌群の一首目「吾が父のけふ五十年の忌の日をたまたま友の別れには来つ」と見事に対応するものであるし、川田の歌群の三首目が「越へ去る友と対へりしかすがに老をかへりみ涙はかくす」であったから、吉井は三首目の初句を「越に来て」と応じ、「友」の語を歌中に用い、川田同様に老いを見つめる表現で締めくくったのである。

それに対して、川田は直ちにその日のうちに返歌の数々を認める。ただ七首と七首の応答に対して、今回は五首であったために「どうもうまく行かず、勝手によみ申候」と記したのである。川田の五首を掲出しておく。

飛驒へ越す山路の町の雪風にやぶれ障子を立てて籠るか

さぬつどり雉子ならぬをわか草の妻と籠らふ大雪のなかに

立山にふり積む雪のしくしくに心は芽えむ酒なしにして

家持が国府のやかたの酒ほがひ吉井勇はあづかり知らず

家持の後と吾が思ふ歌人を越の国びとおろそかにすな

「どうもうまく行かず」と川田は書いているが、前掲吉井の歌群の末尾の歌「友を思ふ夜半を雪風吹きて入る越の旅籠の破れ障子かも」に対して、「飛驒へ越す山路の町の雪風にやぶれ障子を立てて籠るか」と詠み始めるなど、巧みな応じ方である。四首

目・五首目に見られるように、越中の国司として赴任した大伴家持と吉井勇を比べる詠み方は、川田の好んだものである（第六節参照）。

この日の川田の五首は『京都新聞』ではなく、富山の『北日本新聞』に掲載されている。それは三月十一日の封書の中に「これは京都の新聞よりも富山の方よろしと存じ、本日銀河君へ送りその旨托し申し候」とあり、川田自身の意向によるものである。そして今回も『北日本新聞』の記事は、川田のスクラップブックに貼付されており、吉井・川田のやりとりを復元できるのである。

京都府総合資料館と大阪府中之島図書館とに、別々に眠っている二つの資料群を突き合わせることによって、より一層正確な事実を知ることが出来るのである。

猶、『北日本新聞』に掲載を斡旋した「銀河君」とは、富山の歌人藻谷銀河、本名六郎のこと。吉井勇が昭和十九年に富山を訪問したときに「相聞居伯送迎の記」を『高志』に書いている。富山をしばしば訪れた川田順とは親しかったが、二十年八月の富山大空襲で戦死した。歌集に『仙人掌』⁸がある。富山城址公園には『仙人掌』所収の「夕まけてこゝろさひしくなりにけり遠く澄みたるひくらしのこゑ」の歌碑がある。

三 吉井勇と川田順の書簡の往復

前節では、川田順の吉井勇宛書簡と、関連する新聞記事、川田順の切り抜きなどを一望に収めることによって見えてくるものについて触れた。これが書簡の往復になれば、更に様々の知見を得られたり、面白い現象を知ることが出来よう。ただ、吉井勇が発信した書簡は、吉井勇宛の書簡のように大量にまとめられているわけではない。中之島図書館の川田文庫の川田順宛の書簡には、残念ながら吉井勇からの来信は昭和三十四年のハガキが一通残るのみである。

そこで個人蔵の吉井勇書簡(川田順宛)を使用することによって、吉井・川田の往復書簡の一端を明らかにしてみたい。

まず、府立総合資料館所蔵の昭和二十年五月十一日に書かれた川田順の手紙(消印は十二日、文書番号五九番)を見てみよう。この書簡は「例の疎懶御無音申上候 今朝『高志』入手、老生に賜ひし一聯の玉詠忝く拝誦しつつ今更に御無音の罪自責に不堪候、錦地は雪溶け百花一時に咲き一年の最ましき季なる可しと思ひやり申し候」と書き始められている。

ここで川田が入手した「高志」とは、翁久允が富山で発行していた雑誌『高志』のことである。翁久允は、昭和十一年から高志人社という組織を率いて雑誌『高志人』を刊行しており、川

田順も昭和十四年の「宗良親王と越中の御歌」をはじめとして、十八年の「越中紀行」の連載など何度も寄稿していた。⁹⁾ この『高志人』が、戦時下の雑誌統合の政策により、『富山県人』『越中郷土研究』らの五地方誌と合併させられたときに誌名を『高志』と改めたものである。¹⁰⁾ この『高志』の第二巻五月号に、「高志消息」の総題の下に、まず川田順へ送る短歌九首が記され、次いで新村出へ八首、海雲法師へ六首、小杉放庵へ七首、高田保馬へ六首と、総計三十六首が記されている。五人の筆頭に記され、歌数も最も多く、しかも懐かしい『高志人』の後継誌である。「老生に賜ひし一聯の玉詠忝く拝誦しつつ今更に御無音の罪自責に不堪候」という文言は、あながち大げさではなかったのかもしれない。

『高志』は、戦後再び『高志人』の名前に戻され、三十年近く刊行を続けた。戦後版の『高志人』は大学図書館などでも多く見ることが出来るが、戦前版のもの、特に『高志』と改題された時期のものは稀覯である。ただ、富山県立図書館は、戦前版の『高志人』『高志』を所蔵しており、公立図書館の蔵書の重要性を示している。

富山から送られた雑誌『高志』を手にし、吉井の詠歌を目にした川田は、雪深い八尾に思いを致し「錦地は雪溶け百花一時に咲き一年の最ましき季なる可しと思ひやり申し候」と記した

のであった。吉井もまた川田の手紙に心打たれたことであろう。ところが、この書簡に対する吉井の返信はすぐに書かれることはなかった。その頃、吉井は八尾の地で病床にあったからである。吉井の返信が書かれたのは、五月十九日のことであった（消印は五月二十日）。この資料は便箋三枚の長文で、吉井の心情がひしひしと伝わってくるものである。

前略

「高志」の拙き「消息歌」についての御書面、まことに忝く拝受、早速御返事差出す可きの処、八日来高熱を發し臥床（或は質扶斯歟との疑ひありしもこれは唯懸念に過ぎざりしは幸甚）漸く兩三日前平熱に復して離蓐致すといふ有様にて、御返事認むることも出来ず、まことに失礼仕り候。吉井の文面に拠れば、五月八日から高熱が続き、平熱に戻ったのは十日ほど後のこと、一時はチフスを疑われるほどであったらしい。そのころ、吉井の盟友小杉放庵や、吉井が社名の名付け親となった甲鳥書林の矢倉年が吉井を訪ねてきたが、病中の出迎えとなったのである。手紙は次のように続く。

右のやうなる病氣最中に、矢倉君、放庵君などの来尾あり、まことに残念至極に候ひしも、老骨の身の病魔には打克ちがたく、空しく蓐中相見ゆるの外致し方なかりし次第に御座候。無念お察し下されたく候。（中略）荒寺の一室は、見

るも無慘なる住居にして、丁度矢倉君入來の節の如きは本堂に死人を擔ぎ込まれ途方に暮れ居りし最中にて（下略）

先の、川田の書簡の宛先は「富山縣婦負郡八尾町川崎順二先生方 吉井勇大人」であった。壺中庵川崎順二は、八尾町の医師であり、越中おわら節保存会の顔役で、小杉放庵なども旧知であったため、吉井が八尾疎開に際して頼った人物である。ただ、この時、吉井は川崎のもとにいたのではなく、常松寺という法華宗の寺に居を移していた。戦争末期の多難な時期でもあり、吉井の八尾時代は辛い思いが多かったが、この常松寺滞在の頃は、特に辛酸をなめるに近いものがあつたようだ。そのことは吉井の「私の履歴書」^①などにも記されていたが、この書状によって、当時の悲惨さわまりない状況が手に取るように分かるのである。それでも吉井自身は手紙の末尾には次のように述べている。

医者から寺へ、寺から再び娑婆へ出るなど、考へやうに拠つては目出度し、人生いろいろ辛酸多く候へども、かうなると小生いつも勃然として反抗的に勇氣起り、なあとに負けずたまるものかといふやうな分に相成候。

寺は常松寺、医者は川崎順二のことであろう。「寺から」「娑婆へ出る」とあるように、この後、吉井は常松寺を出て、戯曲家である契月居小谷恵太郎のもとに移ることになった。恐らくそ

の転居通知を受けてであろう、六月七日付の川田順の書状（文書番号六一）には「御移居のこと御状にて敬承、亡者と背中合の御すまひは風流も過ぎたるものと御同情申上候。矢倉年君が御訪問せし時の模様も同君よりくはしく承候。今度の御新居は御心持よき事と御喜び申上候」と書き始められている。このように、新発見の吉井勇側の書状を一つ介在させるだけで、状況が極めて具体的に分かるようになる。

猶、六月七日の手紙には、「湯川秀樹博士より依頼にて、大兄と小生との合作の書画帖をとの事に候。依而小生後半に既に悪筆揮ひおき候。何卒大兄前半に御揮毫を下され、更に題箋へも適当に御書き被下度候。帖はいづれ湯川氏より御届け申上る事と存上候」とも記されており、細川論文が紹介した吉井勇宛湯川秀樹書簡¹²に記されていた画帖の制作過程が一層具体的に明らかにするという副産物もある。

四 発信側と受信側 — 書簡目録・書簡翻刻の集成 —

伝記研究において、書簡の果たす役割が重要であるのはいうまでもない。文豪と呼ばれる人々の本格的な全集では、必ず書簡編が編纂されている。漱石しかり、鷗外しかり、藤村しかりである。全集とは切り離されて、全四巻の大部の『与謝野寛晶

子書簡集成』（逸見久美編、八木書店、平成十三年、十四年）が作製されることもある。これらの書簡の集成は、漱石なり晶子なり、すなわち発信者を基準として揃えたものである。当然のことながら、これら発信者を中心に書簡を集めることは、大変な労力を必要とする。書簡の保存は受け取った側、受信者によってなされるからである。書簡を送った側は、手控えでも取っておかない限りは、自身の書いたものは手許にないはずである。そのため、文学者の書簡を大量に保存している日本近代文学館では、〈文学者の手紙〉というシリーズを刊行しているが、そこでは発信者別の書簡集成のみならず、「有島武郎宛の手紙」「有島生馬宛の手紙」「徳永直宛書簡」「坂本一亀宛書簡」などというくくりで、資料が提示されている。

発信書簡と受信書簡との蒐集比率に関して注目すべきデータがある。昨春、岡山県笠岡市立図書館が、森田思軒の書簡類目録を収録した資料集『森田思軒資料集』を刊行した。司書の小室恵子氏などが尽力した大変な労作である。思軒の出身地である笠岡市が寄贈を受けた資料が基になっているが、そこに収められた書簡類は、思軒発信のものが約一一〇通、思軒受信のものが約一七〇〇通であり、実に十倍以上の開きがある。それでもこの倍率はまだまだ小さいものであると推測される。思軒発信のものは家族宛のものが中心で、家族によって大切に保存さ

れていたものだからである。これがなければ、発信書簡と受信書簡の比率は更に大きく広がっているはずである。もちろん家族や親族に送った書簡は、当人の人柄を知る上で極めて重要で、それらが公開されれば、たとえば『平福百穂書簡集』（富木友治編、高井有一解説、翠楊社、昭和五十六年）を読むような温かい気持ちになれるであろう。と同時に『森田思軒資料集』所収の書簡類は、思軒研究のみならず、それら書簡の発信者の研究にとって極めて貴重なものである。こうしたことを考えれば、今後は、集積されている受信者側を基準とした書簡集成、書簡研究が加速される必要があるのではないだろうか。

その意味で示唆的であるのは、笠岡市と同じ岡山県の倉敷市立倉敷図書館が『倉敷市蔵薄田泣菫宛書簡集』（八木書店）を刊行中であることである。こちらは更に大がかりで、平成二十六年の作家編に始まり、詩歌人編、文化人編と、一年一冊のペースで、二〇〇通前後の書簡が厳密に翻刻されている。恐らく今後の書簡研究の一つのモデルケースとなるであろう。

こうしたいわば「宛書簡」の翻刻・研究・データベース化に比較的早くに取り組んだ例として、新潟県糸魚川市の糸魚川市教育委員会・相馬御風記念館の『相馬御風宛書簡集』がある。平成十四年の「歌人・詩人・俳人の書簡」に始まり、「小説家・評論家・随筆家・劇作家・翻訳家の書簡」、「芸術家・芸能人・出

版者・教育者・宗教家の書簡」、「学者・研究者・政治家・軍人・実業家の書簡」と数年おきに着実に歩を重ねている。故郷糸魚川に籠もり、文字通り「野を歩む者」の一生を貫いた相馬御風にとって、糸魚川市がこうした作業を行うことは、何よりの顕彰となるであろう。

ここでは、『相馬御風宛書簡集』の成果を援用して、吉井勇と相馬御風のやりとりを復元してみよう。

『相馬御風宛書簡集Ⅰ 歌人・詩人・俳人の書簡』に、昭和二十年三月一日の御風宛吉井勇のハガキが収録されている。¹³そこには次のように記される。

今度急に表記へ移るようになりました。今宿屋にゐますが近々この町に居を定めることにしてゐます。大分近くなりましたからそのうち御目にかかる時もあるやうにおもはれます。さういう時の来るのを楽しみにしてゐます。

新潟県糸魚川町五二の相馬御風宛てに、隣県富山県に移住してきたことを知らせるハガキである。「宿屋」とはこのハガキに記載されている住所「宮田旅館」のこと。この旅館宛に、ただちに、相馬御風からの返事が届く。京都府総合資料館所蔵の三月九日付の相馬御風のハガキ（文書番号四〇五）である。

このハガキは「大分近いところにおうつりになりました由一層おなつかしい気がします」と書き始められ、知人が八尾に出

張の際、吉井来訪を知って、わざわざ知らせてくれた、とも書いてあり、一度講演に行ったことのある御風は、「いゝところであつたと記憶して居ります」と結んでいる。見知らぬ地で心細い思いであつた吉井にとって、ほっとするようなたよりであつたにちがいない。

書簡には、様々な個人的情報が含まれているから、研究とは言え十二分に留意しなければならない。それでも文学者の書簡は「文学生成の場と文学者自身の内面とを、鮮やかに示¹⁴」す、という面がある以上、研究者を魅了し続けるのである。

五 書簡から窺える出版社の状況

書簡の調査は、差出人・受取人の伝記研究に資するだけではない。ここでは、吉井勇宛の川田順の書簡から、戦争末期・終戦時の出版社の状況を浮き彫りにしてみたい。

昭和二十年十一月、終戦からわずか三か月後に、八雲書店は〈新日本歌集〉という新シリーズを刊行する。〈新日本歌集〉という命名のうまさもあってか、新しい時代への期待感から、多くの購読者を得たようだ。木俣修『吉井勇研究』（番町書房、昭和五十三年）から、吉井勇と〈新日本歌集〉に関する部分を引用する。

二十年十一月にはいちはやく『新日本歌集』というものを企画した東京の八雲書店が歌集を乞いにきた。彼は『金泥』という一冊を与えた。小型のささやかな集であつたが、斎藤茂吉や釈迺空や川田順などの集とともに、書物に飢えている人々の手に奪い合うように買われていった。¹⁵

『金泥』の奥付に拠れば「昭和二十年十一月十五日印刷」「昭和二十年十一月二十日発行」であるから、厳密に言えば、「二十年十一月」は刊行日時である。ほかに同シリーズの川田順『夕陽居歌抄』、斎藤瀏『光土』、佐佐木信綱『黎明』、下村海南『蘇鉄』、土岐善麿『秋晴』、結城哀草果『鶏鳴』、吉植庄亮『稲の花粉』の七冊が同時刊行されている。これだけの歌集を同日の日付で刊行出来たのは、終戦後早々に計画されていたとみるべきであろう。そこで注目されるのは、吉井勇に宛てた川田順の二通の書簡である。

まず八月二十五日付のハガキ（文書番号四二三）に「八雲より『新日本歌集』の件 大兄へも申越候事と存上候」とあり、これ以前に書店からの申し入れがあつたことが分かる。このハガキには一方で「戦争終結せしとて掌をかへす如くソツポ向き花鳥諷詠のみ並べ候事も男らしく無く」と、戦意高揚の短歌を作つていた川田の困惑が示されている。この困惑は、企画そのものをどう受け取るかにも関わっているのではなからうか。このハ

ガキから二日前の、八月二十三日に吉井宛に書かれたやや長文の書状（文書番号六九）には「八雲の決戦歌集もちろん中止に候」と書かれている。その二日後に「新日本歌集」という名前が出ていたと言うことは、このシリーズは決戦歌集の焼き直しと推測される。すなわち戦時中に〈決戦歌集〉を依頼していた歌人たちに、敗戦・終戦という変化を踏まえて、今度は〈新日本歌集〉という立場で歌集の編纂・出版を持ちかけたのではなからうか。そう考えれば、川田の困惑も納得がいく。また、佐佐木信綱の『黎明』が「国寿の歌」「奉頌明治天皇歌」「奉頌大正天皇歌」「大札特別観艦船式の日」の詠歌に始まりながら、最後は「新しき日本の国を作り成さむ一人一人ぞ雄々しく正しく」などの「若人に示す」で終わっているのであるが、木に竹を接いだような構成となっているのは、そうした経緯を反映させているのかも知れない。佐佐木信綱、釈迢空、斎藤茂吉、吉植庄亮、川田順、齋藤瀏ら『愛国百人一首』の編者がずらりと顔を揃えているのも、〈新日本歌集〉が〈決戦歌集〉と根幹を同じくすることを暗示するようである。

ところで、昭和二十年十一月二十日に『金泥』以下八冊の歌集が刊行されたと述べたが、これに昭和二十一年二月二十日刊行の岡麓『土大根』を加えた九冊が同一装丁で、扉に「新日本歌集」と朱で印刷されている。計画では更に三人の歌集が含ま

れていたことが、〈新日本歌集〉の末尾の一覧から分かる。諸本によって多少相違があるので略記する。『光土』『黎明』『蘇鉄』三冊の巻末目録には、刊行された九人以外に「釈迢空 山の端」「斎藤茂吉 題未定」「土屋文明 題未定」の名前が見える。『金泥』、『夕陽居歌抄』、『秋晴』、『稲の花粉』では、文明の名前が消えており、早々にこのシリーズから降りたのであろう。「釈迢空 山の端」「斎藤茂吉 題未定」は以上七冊に共通して掲げられていたが、『鶏鳴』のみは「斎藤茂吉 浅流」と歌集名を掲げる。『鶏鳴』印刷の段階では茂吉の歌集名が決定したのである。翌年二月刊行の岡麓『土大根』に巻末目録があれば、その後の経過が分かるのであろうが、同書には目録はない。

予告のみされていた斎藤茂吉『浅流』と釈迢空『山の端』は、結局〈新日本歌集〉としては刊行されず、装丁も判型も全く異なるものとして、前者が二十一年四月二十日に、後者が六月一日に出版されている。判型は四六判で表紙も厚手のものとなっており、刊行が遅れた分造本に恵まれている。奇妙なのは印刷された本文で、四六判でありながら天地左右の余白が異様に大きく、版面のバランスを欠いている。歌集の場合あえて余白を広くとる方式もあるが、この二冊はノンブルまで中央に寄っていて、空白が奇異に感じられる。これは〈新日本歌集〉の一冊として、A六判（文庫判）で版面が組まれたものの、何らかの

事情で四六判で刊行されたものと思量出来る。

ところで斎藤茂吉は〈決戦歌集〉のシリーズのために『萬軍』という歌集を八雲書店に入稿済みで「前渡し原稿料ももらっていたとみえて、その埋め合わせとして出させたのが『浅流』であった」と記される¹⁶。これを一歩進めて考えれば、単なる埋め合わせではなく〈決戦歌集〉が〈新日本歌集〉となるに際して、戦時色の横溢した『萬軍』を取り下げ、『浅流』と差し替えたのではないか。『浅流』は佐藤佐太郎の後記として「伊藤禱一氏と私とでお歌をあつめました」と記されており、茂吉自身の編纂ではない。戦時詠の『萬軍』から正反対の歌集へと切り替える困惑が、自身が選歌することを放棄させたのではなからうか。ちなみに、今日では佐藤の関与はなく「実際は伊藤禱一が一人で選出し」たと推測されている。猶、佐藤佐太郎は「八雲書店が『決戦歌集』と銘うった小歌集を何冊か出す計画をして、岡麓や吉植庄亮などの歌集が出た。その一冊として先生の戦争関係の歌をあつめた『萬軍』というのも出る予定であった」としているが、〈決戦歌集〉は刊行された形跡はなく、この時期刊行された岡麓や吉植庄亮の歌集は〈新日本歌集〉として出版されたものである。疎開中の歌をあつめた岡麓『土大根』や『百姓生活の記録』である吉植庄亮『稲の花粉』は、あるいは〈決戦歌集〉として入稿、脱稿済みであっても、ほとんどそのままの形で移

行出来たのかもしれない。

筆の早い吉井勇も脱稿していた可能性があるが、とすれば素早く差し替えたのである。『金泥』には、昭和十九年に創元社から刊行された『玄冬』に収録した短歌を再掲したものが多いことは、そのことを示唆しているようだ。この歌集では「鷹が峰」を望み「大徳寺」を訪ね、遠くは光悦や宗達、近くは鉄斎や棲風の人や作品を詠み、時流の変化と巧みに距離を置く姿勢が示されている。

こうして、吉井勇宛の川田順の書簡から、八雲書店の〈決戦歌集〉と〈新日本歌集〉との関係が明白になったし、戦時下、戦意高揚の短歌を詠んでいた歌人たちの終戦時の心理状態なども垣間見ることが出来るのである。

六 『流離抄』と〈流離抄賛歌〉

歌集『金泥』の巻末には「昭和乙酉初秋越中八尾の客舎にて」と記されていたが、同年十月には八尾を引き払い、吉井勇は京都府下綴喜郡八幡町に居を移す。京都市内への転居を望んだが、六大都市への人口の集中を避けるための方針などからそれが叶わず、府下に居を構え、吉井の京都時代が再開された。昭和二十一年に入ると吉井勇は堰を切ったように次々と書籍を刊行

する。

それらの中で、やはり注目されるのは、八尾時代の短歌を集めた『流離抄』（創元社、昭和二十一年）である。吉井自身が「或る意味での記念すべき歌集」「自分の歌風にもひとつの転機を劃したのではないかと思ふ¹⁹」と位置づけているように、この時期の一つの到達点を示したものであると言える。この歌集については別稿で詳しく検討したが、ここでは触れえなかった川田順との関係に付いてみてみよう。

中之島図書館川田文庫には、川田が謹呈を受けた歌集が所蔵されている。川田の生涯や歌人たちとの交流から考えて、ここに所蔵されているものはそのごく一部であろう。刊行時期の早いものとしては石樽千亦の『鷗』（竹柏会出版部、大正十年）があり、新しくは川田没後俊子夫人宛の献辞があるものもある。歌友であった吉井と川田は、当然著書を刊行した折に相互に謹呈を行っていたものと思われるが、川田文庫にある吉井の献辞入りの歌集は僅かに三冊のみ。『遠天』（鴨書房、昭和十六年）、『霹靂』（一條書房、昭和十八年）と、幸いなことに『流離抄』も保存されている。

もちろん、京都府立総合資料館には川田の『流離抄』献本の御礼のハガキ（文書番号四九四）が残されていて、「創元社より送付の『流離抄』正に忝く拝受候、直ちに読了致し候 倍々自

在の御詩境不堪健羨候」と述べ、さらに用紙事情が悪く印刷が裏側に透き通っていることを惜しんでいる。文面や、判読出来る消印の一部から推測して、昭和二十一年一月十九日のものと思われる。吉井勇の刎頸の友の一人である小杉放庵からの礼状のハガキも一月のことであるから、『流離抄』の刊行與付は二十一年十二月であるが、友人たちの手元に届いたのは、翌年一月中旬頃であったと思われる。

さて今回は書簡以外に、川田側の資料としてもう一つ面白いものがある。それは「流離抄」（墨書）と題した、川田順の和歌二十八首が記された三枚の原稿用紙である。吉井の『流離抄』からの抜き書きではなく、冒頭に「吉井勇大人の新歌集を読みながら」と記しているように、いわば〈流離抄賛歌〉（以下、吉井の『流離抄』と区別するため、便宜この名称を用いる）ともいうべきものである。冒頭の「家持の国府の館にくらべむや吉井の大人の住める古寺」に始まり「家持にまさる歌びとわび居すと豈知るらめやいまの越びと」「越にして君が相許す友ありや池主もゐらず広縄もゐらず」などと、大伴家持と吉井の境遇を比較するお得意の方法の歌が七首含まれているが、それ以上に注目されるのは、『流離抄』所収の吉井の短歌の一首一首と具体的に対応する和歌が多いことである。

たとえば、川田の「すきまかぜ迦楼羅の笛と聴きなして寺に

わび居すあな吉井大人」は、『流離抄』「高志消息 迦楼羅篇 小杉放庵君に」の歌群中の「友をおもふ夜半は破れ戸の風の音も 迦楼羅の笛のごとくなつかし」に対応するものであるし、「つぶさるる蚤の念仏を聴きながらなむあみだばと唱へけむかも」は、『北陸荊中吟 蚤の歌』の「蚤の中の阿闍梨なるべしとらへられ指の下にて念仏申すは」を踏まえたものである。また「吉井大人を寒からしむるひびきあり鬼の気こもる李長吉の詩」は「読余述志 「李長吉集」を読む」の「さすらひの旅にし読めばいとどなほ寒しと思ふ李賀の鬼才も」詩のなかに鬼潜みゐて泣くごとく寒さをおぼえ後は読まずも」などと呼応するものである。「夢にして百済ほとけに抱かると知らゆな妹は眉逆立てむ」「よく喋るわれを富楼那と君はいふ君は大居士維摩なるべし」などのユーモラスな短歌は、それぞれ「蓬廬聯吟 諸仏諸天」の「不思議なることこそあなれ吾は夜ごと百済ほとけに抱れて寝る」「順の大人は富楼那なるべしかなへば重山博士舍利弗にして」に対応するものである。『流離抄』は「高志消息」「蓬廬聯吟」「北陸荊中吟」「読余述志」の四部構成であるが、まんべんなく全体から歌を取ってきて、それと呼応するように歌を作っている。この原稿用紙の末尾には「昭和丁亥正月廿日 川田順」と記され、『流離抄』を送られてから早々に作成されたものであることがわかる。一節二節で見たように、川田は吉井宛の短歌を

作歌すると、新聞社などに送ると共に、吉井に自筆の歌稿を届けているから、これもそうしたものであろう。

七 雑誌『洛味』のこと

一月二十日という日付の原稿があるにもかかわらず、川田の〈流離抄賛歌〉が活字となるのは、半年以上も先のことであった。掲載誌は、戦前からの伝統ある京都の雑誌『洛味』で、戦時中休刊を余儀なくされていたものが、昭和二十一年九月に復刊した。その第六輯である。

ここで復刊後の『洛味』の歩みを簡単に見ておく。復刊第一輯の四頁には本輯執筆者紹介として三十一人の名前が載っているが、そこには恒藤恭、吉澤義則、湯川秀樹、吉川幸次郎、澤潟久孝、新村出、江馬務、川勝政太郎などの多分野の学者がずらりと顔を並べ、これに吉井勇、川田順、そして和辻春樹京都市長と豪華さわまりない顔ぶれである。第二輯から四輯までは中村直勝の京都と日本文化の力作が巻頭を飾り、定番の文化人の名随筆、吉井や川田や白井喜之介の短歌や詩など、毎号二〇〇頁前後で定期的に刊行されている。

『洛味』の第五輯は、表紙が福田平八郎、扉絵が金島桂華という豪華な組み合わせ、執筆者も、食満南北「老名優」をはじめ、

笹川臨風、佐佐木信綱、鍋井克之、宮崎市定、市川猿之助など総勢四十名を遙かに超えて二二四頁に及んだ。もちろん吉井や川田も詠草を寄せている。洛味愛読者カードというハガキが挟み込まれ「洛味クラブを組織する予定」などと印刷されている。裏表紙に記された日付は、第四輯の一月後、昭和二十二年二月二十日印刷、二十五日発行であり、月刊もきちんと守られている。ところが、最終頁の奥付には昭和二十二年六月二十日印刷、七月一日発行と記され、裏表紙の日付と齟齬がみられる。これは二月発行で作業はほぼ完成していたものの、何らかの事情で刊行が大幅に遅れたことを示しているのではないかと。奥付は書き直されたものの、裏表紙の日付は初案の形が残ったものと思われる。もし当初から六月発行の予定ならば、川田の〈流離抄賛歌〉はこの第五輯に十分に間に合うはずである。新刊書に対する賛辞を籠めた歌であるから、早いに越したことはない。第五輯が二月刊行予定、第六輯も三月予定であったからこそ、川田は五輯に「寒林行」（恐らく寄稿済みだったのだろう）、第六輯に〈流離抄賛歌〉と考えたのであろう。

第五輯『洛味』の刊行が遅れたために、第六輯は更に遅れ、九月三十日の発行である。歌集の刊行から約十一か月後、川田の読了・投稿から八か月後の活字化公刊は川田の意図とは大きくずれたものであった。掲載誌『洛味』を見るだけではそのこと

は分からないが、自筆原稿に日付が入っており、それが保存されていればこそ以上のような推測が可能になるのである。逆に掲載・公開を急いだはずの〈流離抄賛歌〉から、『洛味』という雑誌を取り巻く状況がのっぴきならぬものであったことが窺われるのである。『洛味』第六輯は刊行の遅れだけではない。全六四頁、第五輯までの分量の三分の一から四分の一という侷びしさである。「つひにこんな薄つぺらなものになりました」という編集後記は、切歯扼腕する発行者側の思いが伝わってくる。第七輯は翌十月二十日刊行、やはり六四頁の薄冊で、合名会社洛味社発行の雑誌はここで一旦途絶える。

二年後、昭和二十四年十二月に、新生第一輯として『洛味』が復活、発行所は吉井勇とも親交の深い臼井喜之介の臼井書房。判型は同じ、一三六頁。表紙裏や裏表紙の、京都織物株式会社、富久などの全面広告や、平野屋、瓢亭、中村楼、大市の折り込み広告、京都市交通局・観光局などの本文一頁全面広告などを入れ、全京都のバックアップを得ての船出であった。吉井勇も忘吾亭二題の詠草を寄せているが、二十四年三月に京都を離れた川田順の名前はなく、二十四年七月に逝去した姉崎正治の遺稿が掲載されていることが、新生『洛味』にいたる二年間の時間の長さを示していると言えようか。

おわりに

以上、京都府立総合資料館所蔵の吉井勇宛川田順書簡の一部を取り上げて、そこから見えてくる問題について考えてみた。書簡の受取人の吉井勇や発信人の川田順の伝記研究に資するのみならず、戦中から戦後にかけての出版社の動静や、歌人たちの困惑ぶりまで浮かび上がらせることができた。この時期は多くの雑誌が統合されたり、休刊したり、復刊したり、受難の時期でもあったが、書簡やそれに同封された資料は、その裏面史を示してくれるようである。

また書簡の場合、返信、再返信とつなぎあわせて、往復書簡を再現できれば、いっそう大きな効果を発揮する。そのためには、第一段階として、現在多くの資料館や文学館が所蔵している、宛先ごとにまとまっている書簡をある程度データベース化する必要がある。そうすれば、それぞれの書簡の返信を所蔵している個人や他の資料館などの資料と組み合わせることができ、本稿では、川田の書簡に対応する吉井の返信を提示したり、糸魚川市の相馬御風資料館と府立総合資料館の書簡を対峙させてみた。

書簡だけの対応に限定する必要はない。中之島図書館川田文庫に所蔵されるスクラップブックの新聞資料や書籍などは、関

係者が直接手に触れたという点で、いわば歴史の生き証人である。これらを書簡資料と対応させることによって、当時の状況を生き生きと再現させることができる。戦時中の稀覯雑誌『高志』を保存している富山県立図書館も含めて、資料館・図書館・文学館に点在する資料を組み合わせ、いっそう活用していくことが今後の課題である。

(附記)

著書、雑誌、新聞等、活字資料からの引用に際しては、仮名づかいはそのままとし、ルビのたぐいは省略した。また漢字は新漢字に統一した。

資料の閲覧にご高配を賜った、京都府立総合資料館、大阪府立中之島図書館、富山県立図書館、日本近代文学館、早稲田大学図書館等の諸機関に感謝申し上げる。また、種々ご教示を賜った京都府立総合資料館の土橋誠氏に厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 平成二十九年春より京都府立京都学・歴史館と名称変更予定、本稿執筆時の名称で記述する。
- (2) 吉井勇（一九九五年）『吉井勇全歌集』中央公論社。
- (3) 細川光洋（二〇一五年）「湯川秀樹未発表書簡吉井勇宛六通（翻刻）附吉井勇宛未発表短歌を含む九首」静岡県立大学国際関係学部『国際関係・比較文化研究』一四の一。
- (4) 資料館の目録で発信年が確定されている最多のものは、昭和

二十年の十九通、次が二十一年の九通である。これ以外に、文書内容から二十年の投函と思われるもの数通がある。

(5) 柳瀬美紀(二〇一五年)「香美市立吉井勇記念館」『日本近代文学館』二六三号、に要を得た紹介がなされる。

(6) 本稿で引用する書状には、句読点があるものや、文章の切れ目を空白で示すものが混在する。表記の統一のため句読点を補った箇所がある。

(7) 刊本『流離抄』との主要な異同を付記する。カッコ内が刊本である。「越に来てわび住みすれば(旅寝をすれば)」、「切歯して(こころ深く)思ひ極むるところありと(ことありと)」

(8) 昭和六年に霸王樹社から刊行された。四六判、装丁と口絵は郷倉千靱。本文二九四ページの厚冊、新作数十首を加え歌数七五五首が、昭和五年から歌作を始めた大正七年(大正六年作一作を含む)まで、倒叙的に排列されている。旧姓時代の溝上(小倉)遊亀、石樽(五島)茂らとの交友を語る「巻末手記」には、大正末昭和初の頃「兵庫御影は川田順氏の山海居」を訪ねたことも記されている。

(9) 戦前の『高志人』時代には八回、『高志』時代に三回、戦後の『高志人』時代にも六回の寄稿がある。

(10) 田坂「書物を紡ぐ人々——吉井勇『流離抄』を中心に——」『文学・語学』二一七号掲載予定。翁久允(一九七三年)「高志人三十五年を顧る」『翁久允全集』第十卷、同書刊行会。

(11) 吉井勇(一九五九年)『私の履歴書』日本経済新聞社、第八集。

(12) 注(3) 細川論文。

(13) 書簡番号七二三七。同書には、御風宛吉井勇の書簡が、昭和

十二年春から夏への中国四国旅行の三枚など、他に五通が収載される。十二年のハガキについては、細川光洋(二〇一四年)「吉井勇の旅靴 37」『短歌研究』五月号、に言及がある。

(14) 松村友視(二〇〇八年)「文学者の手紙」が架橋する(距離)『文学者の手紙Ⅰ 明治の文人たち』日本近代文学館。

(15) 後述するが、茂吉や釈道空の歌集は、厳密には『新日本歌集』と区別すべきものである。

(16) 秋葉四郎(二〇一二年)『茂吉 幻の歌集『萬軍』 戦争と斎藤茂吉』岩波書店。

(17) 前掲秋葉書。

(18) 佐藤佐太郎(一九八八年)『短歌を味わうところ』角川書店。秋葉前掲書にも言及がある。

(19) 注(2) 書。

